

佐浜泥層より産出したエイ類尾棘化石

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 謙二, 柴, 正博 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025054

佐浜泥層より産出したエイ類尾棘化石

横山謙二*・柴 正博**

1. はじめに

浜松市佐浜でナウマン象の再発掘調査期間中、青島 晃氏により佐浜泥層貝層上部からエイ類の尾棘化石が発見された。日本国内においてのエイ類尾棘化石の報告は、中新統門ノ沢累層白鳥層産 *Dasyatis ? masude* (Hatai et Kotaka, 1962)、中新統明世累層山野内累層下部 "*Dasyatis*" *nipponesis* (Hatai et Kotaka, 1962)、上部鮮新統掛川層群大日累層 (横山ほか, 2001)、更新統下総層群 (成瀬ほか, 1994) などがある。しかし、そのほとんどが科名・属名が未確定である。その理由としては、現生種との詳細な比較が十分に行われていないためと考えられる。

本稿では佐浜泥層貝層上部からエイ類の尾棘化石の記載を行ったが、現生種との比較のために、現生種のアカイ科ヒラタエイ *Urolophus aurantiacus* Müller et Henleの尾棘と比較を行った。なお、本報告をまとめるにあたり、東海大学海洋科学博物館の佐藤 猛氏と野口文隆氏に御協力いただいた。ここに記して厚くお礼申し上げる。

2. 化石標本記載

Batoidea エイ類

Caudal spine 尾棘 (図1, 図2)

(1) 計測値：棘長73.9 mm、棘幅5.6 mm、棘厚2.86 mm。

(2) 記載：本標本尾棘は、細長く平たい棒状を呈する。基部で丸みを帯び棘頂で鋭く尖る。両縁には、鋸歯状の細棘が観察できる。細棘は基部方向に傾き、棘頂側で粗く基部で細くなる。その数は、棘頂側で1 cmに7本、基部側で1 cmに17本ある。背側面には、3条の深い条溝がある。その間の条線は円頂で平たく、まっすぐに伸びる。腹側面は、凸状面をなす。

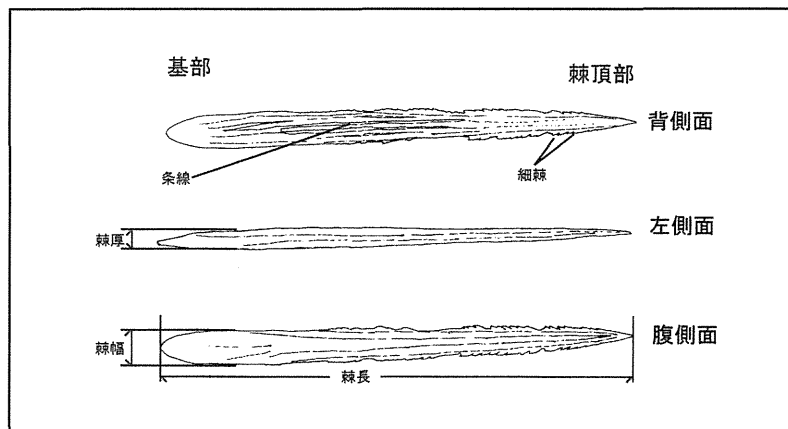


図1. 尾棘化石計測位置と用語.

*コア・エンジニアリング

**東海大学自然史博物館

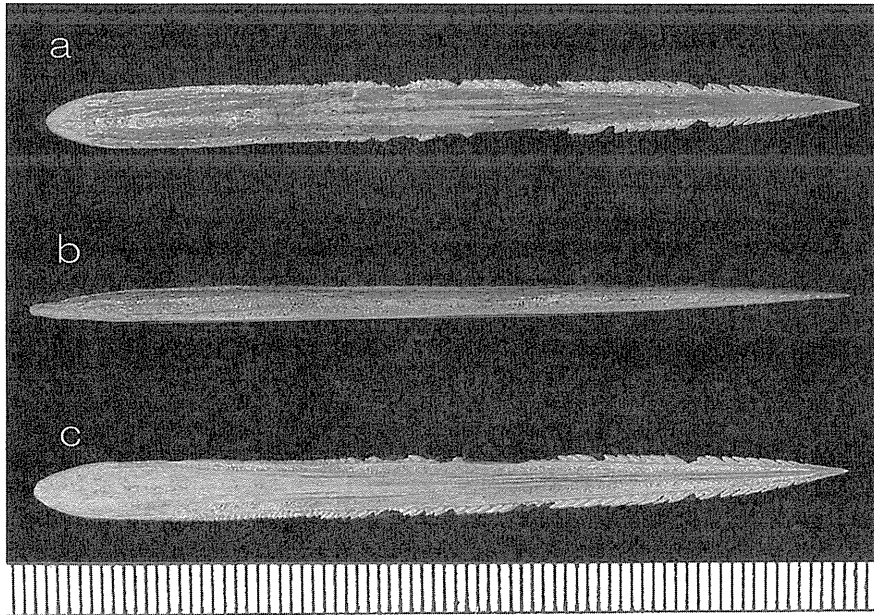


図 2. 尾棘化石. SUM-CV-P0007.

a : 背側面.
b : 腹側面.
c : 左側面.

3. 現生種記載

Rajida ガンギエイ目

Rajida ガンギエイ亜目

Dasyatidae アカエイ科

Urolophus aurantiacus Müller et Henle ヒラタエイ (図3)

(1) 標本番号 : MSM.70-448 (東海大学海洋科学博物館標本)

(2) 計測値 : 体長276.0 mm、体幅155.0 mm、棘長45.0 mm (露出部のみ)、棘幅4.49 mm、棘厚1.80 mm。

(3) 記載 : 本標本の尾棘は、尾部後方3分の1程から露出し、尾鰭の付け根付近まで延びる。基部10 mm程が体内にあり、45 mmが露出する。棘長は体長の約20%の長さである。尾棘両縁には、鋸歯状の細棘が観察できる。細棘は、尾棘の中央から棘頂にかけて発達し、1 cmの間に8本観察できる。対し基部側では、肉眼では確認できない。背側面には、3条の深い条溝がある。腹側面は、凸状面をなす。

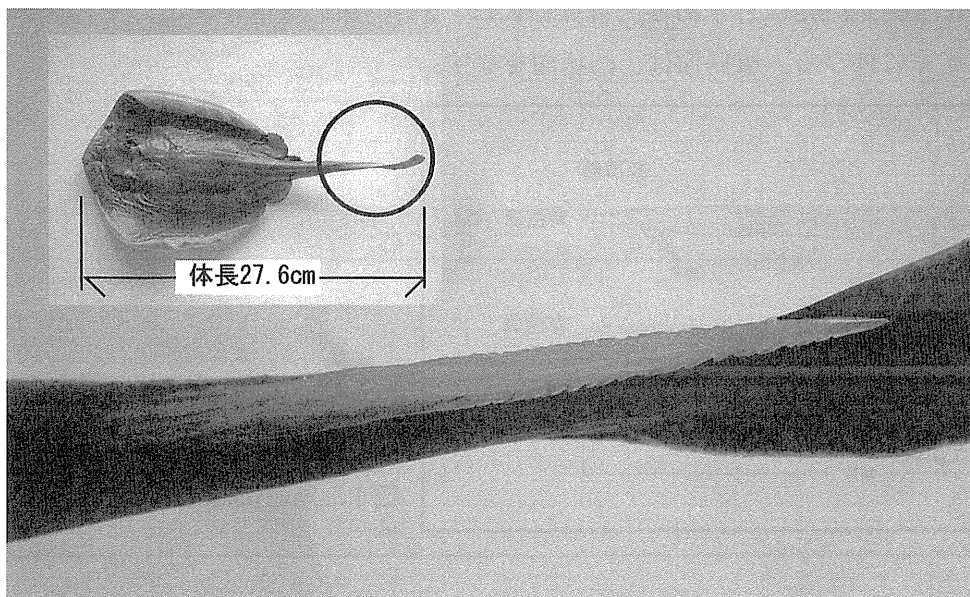


図 3.
Urolophus aurantiacus
Müller et Henle
ヒラタエイの尾棘.

4. 考察とまとめ

現生標本ヒラタエイの尾棘は、上述の化石標本とくらべ両縁に細棘が見られること、背側面・腹側面の形状などの類似がみられた。しかし、棘長が化石標本より小さいのに対し、棘頂部の細棘が化石標本よりわずかに大きい。化石標本の尾棘は類似点を考慮すると、ヒラタエイの同科レベルの近縁種のものであると考えられる。ヒラタエイの計測値から化石種の体長を推定すると、360～370 mmと考えられる。

本報告では、尾棘化石の属種の確定にはいたらなかったが、ヒラタエイと同科アカエイ科のもと対比できる可能性がある。アカエイ科のヒラタエイやアカエイは、沿岸浅海の砂泥底で、ゴカイや二枚貝などの底生の小動物を捕食して生息する。

本化石標本の属種の確定については、今後、尾棘を備えるガンギエイ亜目アカエイ科アカエイ、マダラエイ、ウシエイ、ツバクロエイと、トビエイ科トビエイ、マダラトビエイ、イトマキエイなどの現生種の尾棘と比較する必要があると思われる。

引用文献

- Hatai, K. and Kotaka, T. (1962) : *Dasybatus* from the Japanese Miocene. *Transactions and Proceedings of the Palaeontological Society of Japan, New Series*, 45, 201-205.
- 成瀬 篤・林 清和・岩井立弥・黒田正直・朝田 正 (1994) : 更新統下総層群の板鰓類. 瑞浪市化石博物館研究報告, 21, 47-56.
- 横山謙二・柴 正博・新村龍也 (2001) : 掛川市上西郷における掛川層群産鯨目化石発掘調査の成果ー板鰓類化石ー. 海・人・自然 (東海大学博物館研究報告), 3, 101-111.